
交易の旅路

福寺なつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

交易の旅路

【Nコード】

N8639F

【作者名】

福寺なつ

【あらすじ】

幻想水滸伝2主人公視点、真の紋章や坊ちゃんへの小説ラストです。これはサイト「花住時」にて載せていた二次創作小説です。

> 交易の旅路<

キヤロの街でユニコーン隊に入ったのは14の頃だった。

ゲンカクじいちゃんが死んだあと、ジョウイと入隊した。

ナナミを一人にすることに迷いがあった。

だけど、ナナミは笑顔だった。僕達を見送る時は。まるで、いつもどおりの、笑顔みたいだった。

ユニコーン隊では、内部試合でジョウイと同時優勝をしたことがある。

部内では、僕もジョウイも駆けっこが早い方だった。

ナナミとの日々の鍛錬のおかげだろう。

逃げ切れなかった方が、ナナミの試作料理の犠牲者になったのだ。僕たちの足が速くなるに連れて、ナナミの料理の幅も広がった。

僕は、ぼんやりと、そんなことを思い出していた。「こんなところで、どうしたの。たいこうぼうも豚に乗りたいの?」

噂をすれば影。

ナナミは背後からぬつと首を近づけ、囁いた。

「シューウさんが探してたよ」

デジャブだ。

「なーんてね、嘘よ」

心臓に悪い嘘について、ナナミはユズの方へ走っていった。

ここは、こくてんこ城の端っこ、農園場だ。

僕はユズが来る前、ここで走り回っていた「韋駄天」のスタリオンのことを考えた。

エルフの村が焼かれたときも、俊足を生かして仲間を助けたそう
だ。

そのスタリオンに、僕は足の速さで勝った。

ナナミとの鍛錬のおかげに他ならないと思っている。

目安箱には様々な苦情が投げ込まれている。

しかし、僕には手紙を読むことしか出来ない。

自分の部屋ですら、僕の意味では引越できないのだ。

それでも、ある時は劇場の片隅、はたまたある時は酒場へと、何かから逃げるように移動している美青年を見かけると、こんなことを思ってしまう。 さすが、元は吸血鬼・ネクロードのアジトだ、と。

「待っておつたぞえ」

僕の部屋には鍵がない。

時折どこかの盗人が忍び込んでいるようだが、今日のお客様は紋章の持ち主の一人だ。

「おんし、わらわの安眠を守る気はないのかえ？」

眉間のしわが深い。怒りの深さを表しているのだろう。

口に出す勇氣はないので、心の中で怖いと絶叫する。

「あの、スタリオンとかいう者が墓場を走り回って、うるさい！早く、なんとかするのじゃ！」

「なんとかかっていつても・・・」

自分で雷落とせばいいじゃないか。

ああ、生き血を吸いまくるという手もあるぞ。

迫力に圧倒されていると、シエラは深いため息をついた。

「わらわは、静寂と孤独に慣れた身じゃ。・・ああゆうのは、かなわん」

「・・・スタリオンの底抜けの明るさのこと？」

おんしもあと、200年ほど生きれば分かるうが、とシエラはふと目を伏せる。

「自分の将来に確信を持つ者が、たまらんのじゃよ」

わらわには、ないからのう、と淡々と呟いたその時。

「・・・たいこうぼうさん？」

声の方を見ればドアの隙間から、クラウドの顔が覗いている。

「ノックをしたのですが・・・」

「まあクラウドさん」

さっきまで枯れ切っていたはずのシエラが、大変身した。

シエラの趣味ってよく分からない。

クラウドが帰ったあと、僕はシエラに本心を尋ねてみた。

「・・・おんしの目は、ほんに節穴じゃのう」

節穴。そう遠くない過去にも、そう言われた記憶が。

「クラウドさんの良さが分からぬとは」

そう、そいつも紋章の持ち主で口が悪くて。

「あの方は稀に見る、純粹で素朴でかわいらしいお方じゃ」

なるほど、人の目を節穴あつかいする、シエラやルックとは大違いだ。

「・・・おんし、今わらわと正反対だと思わなんだか」

「自分じゃないものに、憧れるってやつでしょ」

「たわけっ」

容赦なくシエラのでこぴんが、僕の額に炸裂する。

「ひ、ひとごろしっ」

衝撃波が僕の真横をすり抜けて行った。

「手加減したに決まっておろう。それよりおぬし、クラウドさんが来ることをわらわになぜ黙っていたのじゃ？」

「偶然だよ」

「本当かのう、あの方の純粹さをおんし、利用しよう」と

「シエラのほうが、つけこもうとしているように見えるけど」

ふん、これだから子どもは、とシエラは憤慨した。

「わらわは、あの方を邪悪なものから守りたいという一心なのじゃ」

「あのさあクラウドがもし、キバ將軍そっくりに成長しても？」

「案ずるな、クラウドさんは100%母君似じゃ。それより、おん

し、あの韋駄天のこと頼んだぞえ」

シエラは自信たっぷりに微笑むと、颯爽と去っていった。

僕は、その100%という自信はどこから来るのか尋ねる機会を失ったまま、呆然とシエラの後姿を見送った。

「やっぱり、800年も生きた妖怪の眼力か」

「なにか申したか？」

「空耳ですっ！！！！！！」

僕は振り向いたシエラに、あわてて首を大きく何度も左右に動かした。

地獄耳だ……………。

世界一の俊足を、スタリオンは目指している。

そのために墓場を走り回るくらい認めてあげればいいのに。

そう思ったので、僕はシエラの訴えはすぐに忘れることにした。

それに、将来の展望を奪うなんて、やっぱり出来ないよ。

きっとシエラはそんなことは百も承知だろうけれど。

そうじゃなきゃ、とつくに直談判してるはずだ。

さっきの襲来は、たぶん……………。

僕は肩をすくめると、窓辺の椅子に腰を下ろした。

話相手にたまたま抜擢されたのか、僕の様子を見に来たんだろうな。

ふと、眼下に動くものに気づく。

それは……………。

ビッキーにテレポートを頼んだ。

「たまには、間違えてくれないかな」

ナナミが期待を込めて僕に早口で囁く。

噂では、道具屋の2階にレアアイテムがわんさか眠っているとか。

今日のメンバーは、ナナミ、太公望さん、ゲンゲン、ガボチャ、リイナ、と僕である。

「えいつ」

紋章の力が、僕たちを瞬間移動させた。

テレポート先は、コボルト村である。

僕は交易所に入った。

「光る玉を持ってきたワン？」

僕は各地で買い集めた光る玉をカウンターに並べた。

コボルトたちの目がきらりと光る。

「・・・行きましようか、太公望さん」

僕は売値価格を確かめると、すぐさま光る玉を持ち物袋の中にしまい込んだ。

「いいのかい、それをここで売らなくて」

「ええ、思ったような売値ではなかったの」

もう少し時期を見たほうがいいだろう。

「我々コボルトの心をもてあそんでいるワン！」

ゲンゲンが興奮した様子で、僕に近づいてきた。

素早く彼の目の前に、光る玉をかざす。

「きらきらしているワン」

「ほんとですねえ」

ゲンゲンとガボチャが魅入られたようにうつとりと、玉の中で反射する光を見つめている。

「確かにもてあそんでいるかもしれませんがね」

リイナがたおやかに笑いながら言う。

「たいこうぼう、地道にさあ、こもんじょかひいらぎの実で交易すれば」

光る玉がまるで邪道だという口ぶりなのは、ナナミだ。

「こもんじょの方が入荷が難しいよ。ひいらぎの実もあまり利幅が

大きくないし」

「それにしても」

太公望さんが、ちらりとゲンゲンとガボチャを見る。

「光る玉の魅力ってなんなの？」

僕とリイナとナナミは互いに顔を見合わせた。

「それはやつぱり」

僕はつぶらな瞳のゲンゲンとガボチャを見て答えた。

「コボルトになってみないと分からない、魅力じゃないかなあ」

僕たちは次に、森の村に行った。

昔、ミューズに許可証がなくて困っていたとき、ここまで流れ着いた。

長い旅路だった。

「うまいこともうけるんだな」

「また、光る玉を買占めですか」

ガボチャが不信そうに言った。

「うん」

確かに、僕はここで光る玉を見ると必ず買い占めなくては気が済まない。

「たいこうぼうには、コボルトの血が流れているのかしら」

リイナがさらりと暴言を吐く。

「光る玉の魅力を見無視できない気持ちは、ゲンゲンも分かるぞ」

「ぼくも」

急に2人の目が輝きます。

僕は光る玉を、魅力的な交易のアイテムとして拒めないだけなのだが、あえて否定しなかった。

むかし裏の木の下に宝物を埋めた。

きらきらしたものも大好きだった。

もらわれっこだと言われて、コテンパンにやられたこと。

ナナミが仕返しに行った。
宝物はいつもそばに・・・。

「次はサウスウィンドウに行く?」

はっとナナミの声で我に返る。

「いや、クロム村に」

「じゃ、しゅっぱーっ」

クロム村で僕はなんの取引もできなかった。

ああ、いつになったら交易商ゴードンを仲間にできるのだろうか。
嘆いていても始まらない。

僕たちはいったん、こくてんこ城に戻ることにした。

クロム村を出て、またたきの手鏡を出そうとした瞬間、戦闘になった。

「たいこうぼう、姉弟攻撃よ!」

「相手は一人じゃないかつ」

リイナの投げたナイフであっという間に蹴りがつく。

ナナミと太公望さんがいると、戦闘時に協力攻撃を要請されて疲れる。

ふらりと1歩足を進めた途端、再び戦闘になった。

リイナのナイフが飛んで、ゲンゲンとガボチャの協力攻撃だ。

「なにあれ・・・」

はじめて見た。

ナナミは歓声を上げ、リイナも物珍しそうに見ている。

100匹のコボルト戦士が次々と敵を踏みつけていく。
あっという間に敵が倒れる。

ナナミの目の色が変わった。

「もつと見たい」

僕たちは更に歩くことにした。

村周辺をうろろろするが、コボルト攻撃は出ない。

僕たちはまた、クロム村に戻ってきていた。

「たいこうぼう、ゲンゲンたちが井戸に張り付いてるよ」

太公望さんが指し示した先は、まるでイモリが網戸にへばりついている様を連想させた。

「たいこうぼう、ここらへんで一泊しましょう」

そう言うとしリイナは宿屋の方へ歩き出す。

「そうだね」

考えてみれば今日は街を飛び回って、大変だった。

井戸の方にも声をかけ、宿屋に入る。

しかし、ゲンゲンとガボチャが宿屋に入ってきたのは、とつくに日の沈んだ頃だった。

「一番変わったのは、フリックかなあ」

その日の夕食後、僕たちはテーブルを囲んでくつろいでいた。

この中で最も大人びたリイナと太公望さんが場を仕切っていた。

「3年もたてば、いろいろ印象が変わった方もいらっしやるでしょう」

と、リイナの問いかけ。その答えがフリックだという。

「ええっ、じゃあ3年前はフリックさんあんまりモテなかったの？」

ナナミの反応はあんまりだ。本人がこの場にいたら、傷つくぞ。

「いや、そんなことはないよ、うん」

太公望さんは肩を震わせ、机に伏してしまった。

「3年もあれば、みんな大人になるってことさ」

太公望さんの答えは、月並みな感じた。そんなもんなかな。

「さ、そろそろ休息にしようか」

僕たちはそろそろと部屋へ引き上げる。

今日はナナミと同室だから安心して眠れるのだ。

ところが、ナナミはリイナと同じ部屋に入っていく。

「あれ、ナナミ？」

「あ、言い忘れてたね、わたしリイナさんに占い頼んだの」
ふーん、女の子って占い好きだなあ。

「だから、たいこうぼうは、太公望さんと同室ね！」

「なんで！一晩もかかる占いの？！」

それって呪いとか黒魔術みたいに用意周到なものなのか？

「まあいいじゃない、仲良くねー」

ボタンと扉は閉ざされた。

「ふーん、俺との同室はそんなに嫌なんだ」

蛇ににらまれた蛙が頭の中をよぎった。

冷たい汗が、すうつと背中を流れていった。

「今日は結構歩き回ったよね」

「そうですね、交易は手間がかかりますから」

「でさ、どうしてタンス動かそうと頑張ってるの？」

クロム村の宿屋の一室で、太公望さんは腰に手をあてたまま、楽しそうに僕を見つめた。

「バリケードを築くんですっ！！」

「無駄だな」

タンスは何が入っているのかとても重く僕が先ほどもから一生懸命押しているのだが、びくもしない。

太公望さんは、ごろりと寝台の上に寝転がり、ぼそりと呟いた。

「だってそのタンス、備え付けだよ」

とつと、寝ようよ、と太公望さんは明かりを消した。

真っ暗な中、僕は納得いかないまま、あきらめて寝台に潜り込んだ。

村を巡り歩くことで、今日はとても疲れた。

睡魔がすぐそこで待っている。

「いい結果が出ているといいね」

太公望さんの声に、睡魔が遠のく。

「・・・そうですね、はやく大もうけをして、交易とおさらばしたいです」

目を閉じたまま答える。

再び睡魔はやってきて、僕は眠りに落ちていった。

そうじゃなくて・・・と、太公望さんの声が小さく聞こえた。

次の日、僕たちは城に戻った。

「お疲れ様でした、今日はゆっくり休んでください」

と、シュウさんにいつになく優しい声で告げられた。

気持ち悪い、とナナミが驚異的に小さな声で呟く。

ここにルックがいたら、まちがいなく天変地異を確信しただろう。シュウの言葉を素直に受け取れない僕たちに非があるのだろうか、身構えてしまう。

僕は酒場に行つて、ビクトールにそうつと探りを入れることにした。

「シュウが優しい？さあなあ、別に昨日今日と変わったことはなんにもなかったぜ」

ビクトールは首をかしげ、手酌で酒をあおった。そうか、ということば・・・。

「気の、せいかなあ」

久々に城に戻ってきたからそう見えただけなの、かもしれない・・・と僕は思うことにした。

「なにかあるよ、あれは」

しかしナナミはいつになく怖い顔で思案している。それをビクトールは明るく笑い飛ばした。

「まあ、あいつだって人間だ、気分のいい日くらいあるだろうよ」

「・・・そう、なのかなあ」

納得いかないなあ、とナナミは更にぶつぶつ言っている。

「あんたたち、メンバーチェンジしないでいいのかい」

カウンター越しにレオナが声をかけてくる。

「太公望は外すなよ」

すかさず、ビクトールのチャチャが入る。

「分かってるよ」

あとあと面倒くせえからなあ、とビクトールが豪快に笑う。

「どうする？ ナナミも休む？」

一応聞いてみると、はっと我に返った様子で「ううん、大丈夫だよ」と言われた。

本当かな・・・と思いつつ、更に尋ねてみた。

「これから図書室に行くんだけど」

「・・・大丈夫だって言ってるでしょ、さあ早く行こう！」

ナナミは僕の腕をつかみ、ぐいぐいとひっぱっていく。

あんたたち、メンバーチェンジ・・・とレオナの声が追いかけてくる。

結局ぼくは一人もメンバーを変えることなく、図書室に向かった。

図書館の入り口でシーナとすれ違った。

「ああ、シーナ。通ってるんだって？」

気軽に声をかけたのは太公望さんだ。ちゃんと本を見てるのか？と更に軽口を叩く。

シーナはそんな太公望さんには取り合わず「図書館では静かに」

と、口到人差し指をあててみせた。

ウィンクつきなところが、彼らしい。

去り行く彼と入れ違いに、僕たちはひんやりとした室内で吹き抜けの壁を見上げた。

「あ、たいこうぼうさん」

僕に声をかけてきたのはマルロだ。

エミリアも僕たちに気がついたようだ。微笑を浮かべている。

「こういう所に来ると、ほっとするね」

ナナミが天井を見上げて呟いた。

「そうかな・・俺はかえって・・」

珍しく太公望さんの語尾が消えた。ナナミがとまどったような視線を彼に向ける。

「そう、戦場だけじゃない・・こういうところに来た方が、自分たちの成そうとしていることを、突きつけられる思いがする」

目を閉じたまま、そう言った彼の表情は苦しそうだった。

シユウならば自嘲ぎみにそして自信たっぷりに言ってみせたかもしれない。

ビクトールなら酒を片手に笑ってみせるに違いない。

フリックだったら剣にかけて大切に呟くだろう。

「僕たちが成そうとしていること」

こくてんこ城には直接戦場には行かない者も多くいる。

しかし彼らの存在も大切なのだ。

そして、彼らの存在こそがこの戦いの重さを確認させてくれる。

普通に学院で働いていたエミリア、読書青年なマルロ、料理人のハイ・ヨーその他たくさん普通の人たち。

彼らが戦いに関わることになった、それほどにこの地は変化を迎えようとしているのだ。

紋章を受け継いだとき、こんな怖さを僕は予感すらしなかった。

ひとが集まれば集まるほど、怖くなる。

もし。

そう、もし、僕たちが負けたら？

この人たちはどうなる？

なんて恐ろしい・・・可能性の問いかけ。

「わたしは道場で育ったから、いまは道場とかけ離れた場所にいたいのかもしれない」

ナナミは太公望さんに笑ってみせた。そしてカウンターに走って行く。

「ねえねえ、占いの本あるかな、エミリアさーん」

・・・まだ黒魔術の続きが・・・？

あのクロムの夜の押さえきれない悪い予感が、再び胸をよぎる。一度きちんと確かめなくては・・・。

「ナナミ！占いつてなに？」

「秘密だよ！！あ、じゃあ、またあとで取りに来ます！」

ナナミは元気良くエミリアに念押しをすると、強引に、

「さ、疲れたね！そろそろ休もう！！」

と、図書館から僕たちをひっぱり出した。

確かに精神的に疲れたけれど、胸騒ぎはますます酷くなるばかりだった。

真夜中に目が覚めた。足音がする。

やがて、僕の部屋の扉が開く。

忍び込んできた相手はゆっくりと寝台のほうに近づいてきた。

僕の寝首を、かこうとして。

ほら、もうすぐ彼の手が、僕の顔に。

僕は相手の手首をつかんだ。

しかし、相手は平然としてその手を振りほどく。

「僕を試しているってわけ？」

不機嫌に問いかけるも、相手は何も言わない。

「心外だよ、あなたが僕をここまで疑っていたなんてね」

悔しくなって心にもない憎まれ口がするりと出た。

「やっぱりこの部屋、鍵をつけようかな」

「駄目です」

相手が即答する。

分かりきっていた答えだけれど、やっぱりいい気分はしない。

「僕のプライヴァシーはどうなるわけ」

「ありません。申し訳ありませんが」

これも分かりきっていた問答だけれど、本当に不愉快だ。

「ちなみにこの城でプライヴァシーなんて言葉は存在しませんよ」

正論続きで全く嫌になる。

「あるのは、貴方の代わりはなく、私の代わりはある、という事実だけです」

「そんな言葉は聞きたくない」

思わず僕は耳を手で押さえた。

僕は自分の憎まれ口を後悔した。

そんな冷たく悲しいことを、あなたに言わせた。

同時に、それも正論であり事実であるという現実。

「・・・だから、あなたの代わりはいないのですよ」

相手は窓辺に立つと、窓枠に軽く腰掛けた。

相手の体が月光に包まれる。

「もし私がルカならば」

逆光で相手の顔の表情が見えない。

「あなたは私を今、突き落とさなければならぬ」

ルカが目の前にいて、窓枠に体重をかけていたら。

ここは5階だ。

「できるでしょう？」

「・・・突き落とすよ」

それが、僕たちがこれ以上たいせつなものを失わないための目的だ。

相手はやわらかな微笑を浮かべ、満足そうに頷いた。

窓枠から腰をあげ、僕の前に立つ。

「・・・長居が過ぎたようです。失礼します。・・・今回は私のミス、ということにしておきましょう」

と、言うとは相手は唇の端をほんの少し上げた。

月光に包まれていた時とは別人のようだ。

あれは夢だったのか。

今のほうがいつもの彼なのだが。

一生月光に包まれていればいいのに・・・という思いと、余裕しやくしゃくつてわけか、という不満が交差する。

腹の立つ、あしらわれ方だ。

「・・・恩着せがましい言い方」

ぷいと横を向いて毒づく、相手がぬつと身を乗り出す。

「今回目が開いたのは偶然って可能性について、これから検討しますか？」

ふてくされると、そうくるのか。

「お断りだよ！」

「運も実力のうち、と言うかと思いましたが」
愉快そうに相手が笑う。

「どうして僕が危険を察知して目覚めたって思わないわけ？」

実はたまたま目が覚めただけなんだけれど。

そんなこと死んでも言うもんか！

「それはやはり、二度あることは三度ある、と言いますから」
と言うと、相手は胸元からマジックペンを取り出した。

素早く奪って、ペンに目を走らせる。

「油性じゃないか！！！！！」

鬼がここにも居るよ・・・。

呆然とペンを眺めているうちに、相手は扉を開けた。

「では、よい夢を。たいこうぼう様」

「シュウ！！！」

彼が体を扉の向こうにすべり出させてしまつ前に、僕は叫んだ。
シュウの動きが止まった。

僕は彼の背に向けて、どうしても言わなくてはいけないことを、伝える。

「シュウの代わりなんてのは、いないよ」

真夜中の客人は、背を向けたまま、

「たいこうぼう様、それは・・・」

「戦術家の代わりならアップルがいると言っても言つつもりか」

「その通りです。アップルが技量不足ならば、再び探すまでのこと」
冷徹な瞳がこちらを向く。

「そんなことは、させない」

「たいこうぼう様・・・」

シュウが困ったように呟く。

そして彼は廊下のほうを向いて、驚いたような声をあげた。

「ナナミ・・・太公望さま・・・」

「リーダーのもとに刺客が現れたのかと思ったよ」

太公望さんは平然とシュウを刺客呼ばわりした後で、僕の部屋へ入ってきた。

ナナミは臨戦態勢を崩さずにこちらをにらみ付けていた。

「興味深い話をしていたね、軍師が死んだら？・・・マツシュに聞かせたかったよ」

「シュウさんの代わりなんて居ないよ！」

ナナミが震える声で言った。

「興奮しないで下さい、別に私は命を無駄にするつもりはない。むしろ志半ばで死ぬなんてのはごめんだと思っていますから」

「・・・マツシュもそう思っていたのかな」

太公望さんの独白は空虚な声で、僕は何も言うことができなかった。

あれはコボルト村やクロム村に出かける前だった。この部屋の窓の下に立っていたのは・・・。

「フリックは言ってたよ・・・オデッサの魂に対して恥ずかしくないように生きていくつもりなのに、グレッグミンスターでは酔っ払っちまって悪かったな、って」

太公望さんが、シュウさんが、そしてナナミが意外な名に目を瞠る。

オデッサ・シルバーバーク。

マツシュ軍師の妹であり、フリックの恋人だった、僕が会ったことの無い人。

「軍師の代わりは居るだろうけれど、オデッサの代わりなんて居ないよ」

太公望さんは、顔を背けるようにして、言った。

「シュウ、君の選択肢は、こんな月夜には冷たすぎるよ」

「戦いはこれからも厳しいものになるでしょう」

まるで明日の天気予報のように、よどみない口調でシュウが告げた。

彼の束ねられた髪がざらりと空を切る。完全に僕から背中を向けたまま、彼は階段を下りていった。

背中が視界から消え去る直前。

「それでも私は、後悔はしないつもりですよ」

こくてんこ軍の軍師は、似合わない殉教者めいた顔を、一度だけ僕に見せたのだ。

太公望さんはナナミの背を押して僕の部屋に招き入れた。

「かなわないね、格好いいよ、あの決意」

それだけを揶揄するかのごとく呟き、太公望さんは廊下に出た。

「じゃあね、おやすみ」

残された僕とナナミはしばらく視線も合わさずにぼんやりしていた。

「なんて」

先に口を開いたのはナナミだった。

「なんて遠いところに来てしまったんだろうね」

窓辺に手をつき、ナナミは本当はね、やっぱり嫌なの、と言った。

「反乱軍にすることが？」

「だって、怖いよ・・・たいこうぼうは、怖くないの？」
怖い。

死ぬことが、だけではなくて。これからどうなっていくのか。

先が見えないから怖いのではないと思う。ある程度先を見ている
シウだって怖いのだろうし、すべてを一度見てしまった太公望さ
んだって、きつと。

「もう、眠るね、おやすみ、たいこうぼう」

僕の返事なんて期待していなかったのか、ナナミはくるりと背を
向けて扉を開く。

「おやすみ、ナナミ」

ぱたんと扉は閉じられ、僕は再び眠りにつく。

次の戦いを示す朝日が、僕の頬を照らすまで。

「悪かったな、グレッグミンスターでは・・・悪酔いして・・・」

「・・・金輪際、フリックとはグレッグミンスターには行きたく
ないね」

石版の前で、フリックがルックに謝っていた。

その石版の真上に位置する、吹き抜けの2階の手すりにもたれか
かるようにビクトールが立っていて、真下のやりとりを面白そうに
見ている。

「・・・おう、たいこうぼう、お前さんも見学か？」

「まあね」

僕たちは声を潜めて、そうっと石版を見下ろした。

石版の前では、あの時の水の冷たさはどうの、それを言うならば

あの時お前はこう言ったの、と二人が徐々に興奮していく。

「二人とも、結構酔っ払っても記憶力あるなあ」

ビクトールは呆れたように呟くと、くくく、と低く笑いを噛み殺した。

「え・・・ルック酔っ払ってたの？」

僕が見た限りじゃ、素面もシラフ・・・そもそもルックってお酒に強そうに見えるんだけど。

「あん時のペースはハンパじゃなかったからなあ・・・考えても見るよ、俺だって結構なザルだぜ？」

「結構なサル？」

「マジ呆けか？って、ガキだから仕方ねーか。酒に強いってコトだ、それでもあん時は良い塩梅だったぜ、ほろ酔い気分って奴だ」

僕たちが、ひそひそと話をしている間にも、ルックとフリックの争いは続いていく。

聴けば聴くほど脱線しているようなのだが、もしかして、そろそろ止めた方がいいのだろうか。

「つかみ合いの喧嘩になっちゃうんじゃ・・・」

「まさか、大のおとなが、あんなガキ相手に」

と、ビクトールが苦笑した瞬間。

「痛い！離せよ！！！！」

僕とビクトールは、恐る恐る石版のほうに目を向けた。

ルックがフリックのマントとバンダナを。

フリックがルックの髪の毛を。

お互い引つ張り合っている・・・。

その滑稽な図は、ビクトールの笑いのツボを直撃したようだ。

こらえ切れなかったビクトールの笑い声が、場内に響き渡った。

僕が殺気じみた視線を二人分浴びたのは言うまでも無い。

フリックとルックは、ビクトールや僕の見てる前でガキっぽい喧嘩

を、続行させる気はないようだった。

二人は石版の前で、握手をかわすことによって、なんとか仲直りした。

「しばらくは、あの二人同時にパーティに入れるの止めよう・・・」
彼等の表情が、幾ばくか剣呑であつたため、僕はボソツと呟いてしまった。

「そんなに気にすることもないだろう、あいつら戦力になるぜ」
耳ざとく聞きつけたビクトールは、陽気に笑った。

「まあ、俺が編成に口出すのも変なんだけれどよ・・・たいこうぼう、おまえ太公望に出会ってからグレッグミンスターに行くとき、いつも固定メンバーだよな」

問いかけではない、彼の言葉に僕は頷いた。

「気にするなつて言っても押し付けにしかならねえのかもしれないが・・・」

どことなく気まずげにビクトールは言った。

「今回と3年前の人脈は結構繋がってるからな・・・そう言う俺自身、かなり今回も3年前も深く関わってるから、言っちゃうんだけど・・・まあ、3年前は3年前だ。あの時は、ああいう結末だったが、今回はどうなるか分からねえ。まず、敵が違うからな。」

「そんなことは分かってる」

「言つとくけど、3年前と違って今回は苦しいって意味じゃねえぞ。なんてつたつて、前の軍師も一流だったが、あのシュウも決して引けはとらねえと思う。ただ・・・グレッグミンスターに行くとき々と比べちまうのは・・・仕方ねえと、思う。特にあの場所は太公望の暮らす町だからな」

自分の故郷を思い出すんだろう、とビクトールは言った。

どうして、それを。

「・・・俺だって、あの村を・・・だけどな、たいこうぼう。俺の目的はようやく終わったよ、けど、俺たちの戦いは、まだ終わ

ってねえ。お前は大将だ。時には、全てを横において、突き進むしかねえ時も、来る。そんな時にグラついて欲しくねえんだ。もちろん、ぴしっと俺もフリックも、ああ見えてルックも」

ここでビクトールは、似合わないウイंकをした。

「ぴしっと支えるつもりだからな・・・期待してるぜ」

似合わねえこと言っちゃまった、と照れ隠しのように言って、ビクトールは階段を下りていく。

石版の向こう側から、更に背を押す声がした。

「僕も随分、買いかぶられたもんだね・・・」
ルックだ。

「覚えておくといいよ。僕の目的は、きつと君より長くかかる・・・だから、あせる事はないよ」

それは、彼には似合わない励ましだった。

「マジックペンも、まだインク残ってるし」

「一言余計だよ！！！！！！」

石版の向こうから軽やかな笑い声が、返事をした。

「おやすみ、たいこうぼう」

部屋に戻り、僕は手に受け継いだ紋章を、ふと、見つめた。

どこか、遠い空の下で、同じように紋章を受け継いだ人が、悲しい目をしているのではないか。

そんな妄想が、浮かんできて、僕は瞼を閉じた。

そんな眼差しをさせるくらいなら、代わってあげたい。

けれど僕には、そんな事は言えない。

多分、僕の目も同じくらい、悲しい目をしているのだろうから。

シュウが、昨晚言っていた。

「別に私は命を無駄にするつもりはない。むしろ志半ばで死ぬなん

てのはごめんだと思っていますから。

ああ、そうだね。

僕の志は、故郷に帰って平和に暮らすことかな。

どうか、君も紋章より命を選んで欲しい。

僕の自分勝手な願いと思われるかもしれないけれど。いつか。
もう一度、笑顔で笑いあえる日の為に。

< 終わり >

2002年3月から2003年7月。

> 交易の旅路― 終わり <

（後書き）

ここまで読んで下さった皆様、ありがとうございました。
感想などありましたら、web拍手よりお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8639f/>

交易の旅路

2010年10月8日15時22分発行